兵隊を率いて江代を発ち椎葉から豊後に向う。小倉処平は桐野利秋から託されることがあって宮崎方面へ向う（『薩南血涙史』714p）

五月三日夜、小倉処平と守永守が戦地より飫肥に帰る（『嶠南日誌』）

五月四日、小倉処平と守永守が戦地より飫肥に帰る。飫肥では鹿児島方面からの砲音が聞こえた（『六鄰荘日誌』）

五月九日、小倉処平と守永守が再び戦地に向かう（『六鄰荘日誌』）

五月に宮崎の瓦町米屋広吉宅で会合。鮫島が語ったところでは、自分が佐土原で二百人ばかりを募兵した。兵糧は外浦に官米がある。これを前田七郎がすでに押さえている。海防の件は横山経営（直左衛門）が坂田諸潔・鮫島元と会合した結果、本営詰めの小倉処平と話を詰めることになり、横山と鮫島が処平を訪ねる。鮫島から海防の件をもちかけたところ、すでに飫肥兵をもって諸口と海岸の守備隊を配置したと返答があった。これを聞いて安心した横山と鮫島は坂田諸潔に報告した。鮫島と横山・菊池忠で城ヶ崎（宮崎市）の瀬戸物屋に本営を置く。その時、島津敬次郎も来たので、手狭につき同所の旧宮崎県令邸に移した。

六月十日頃、野村忍介・小倉処平・重久雄七が延岡本営に在り、協議して「各地に分散している西郷軍を豊後方面に集結して小倉・長崎に進出すべき」と有馬源内を宮崎の桐野に送り、進言させたが受け入れられなかった（『薩南血涙史』736p）。

六月二十二日、野村忍介が七中隊を率いて熊田に至る。翌日の戦いに備えて、全隊を五軍に分け部署を定める。一つは、中津隊・奇兵十二番隊・二十番隊（守永守）・を先鋒とし、十六番隊と二十一番隊を後援として小倉処平と重久雄七がこれを指揮して（島津啓二郎も参加）切込谷に向う予定。二つは野村忍介が十三番隊・十五番隊・報国隊を指揮して赤松谷へ向う予定。三つは七番隊・一番隊・十七番隊・十八番隊（石川は負傷入院）が宗太郎越に向う予定。四つは、八番隊・十番隊・十九番隊（米良一穂）・九番隊が陸地口に向う。五つに、本営を鐙赤松街道に置く。午後六時に鐙を出発、雨がふり行軍に苦しんだ（『薩南血涙史』745p）

七月五日、野村忍助・小倉処平が「逃亡者を私に処刑することを禁じ本営に護送するよう」軍令を出す（『薩南血涙史』756p）

七月十日、豊後口の西郷軍が兵制を改め、四大隊とした。総指揮長を野村忍介・総軍監を佐藤三二・小倉処平・石井竹之介とし、この下に大隊長・監軍が置かれた（『薩南血涙史』758p）

八月九日、敗戦を悟った深水嘉平は熊田（北

川村）の小倉処平に面会して「西郷・桐野に政府軍への降伏を薦めるべきである。同意でれば、それを周旋してもらいたい。戦場でこのようなことを言うからには我が身はどうなろうとも覚悟の上である」と進言したところ、処平は「維新の功臣である西郷氏が敗走したからと言って降伏することがあっては、これまで戦死した者に対して何とも申し訳の言葉もない次第である。以後、このようなことを言うべきでない、郷里の名折れである」と返答した。嘉平はとても処平は降伏に同意しないであろうと思いその場を去った（『西南の役薩軍口供書』）。

八月十八日、小倉処平が延岡永井村で自殺する（『六鄰荘日誌』）

九月二十四日、井上毅（こわし・第二次伊藤博文内閣の文部大臣）が小倉処平の件で太政大臣三条実美に進退伺いを出す。十年二月に処平が飫肥に帰る際、伊藤博文に「処平が西郷軍に加わることはない」と保証して、通行書を発行させたことに責任をとっての進退伺いであった。

十二月二十四日、飫肥に小倉処平の死が伝わる（『六鄰荘日誌』）。

七月十日、小倉九十九が嶠南を訪ね、小倉処平の墓碑銘の件で礼を述べる（『嶠南日誌』）。

七月十八日、川越龍平が小倉処平の墓碑銘について嶠南を訪ね相談した（『嶠南日誌』）。

明治十一（一八七八）

明治十三（一八八〇）

十一月十八日、小村寿太郎が留学から帰朝。それより飫肥に帰省して小倉処平の墓を詣でる。細島に上陸し、飫肥まで下駄ばきで帰ったという（『小村寿太郎』黒木勇吉・昭和43年発行）。『骨肉』50pによると「開成学校時代と同様の和服姿で飄然と帰郷した」洋服姿を予想した郷人を驚かせたという。寿太郎は処平の墓参りをして「墓前にぬかずいて慟哭を久しうした」。

主な出典

『安井息軒先生』若山甲蔵
『続日向纂記』長倉英士
秋月文書『飫肥藩人給帳』宮崎県史・近世・史料編
『黌舎永観』（日南市社会教育課）
『六鄰荘日誌』平部嶠南
『嶠南日誌』平部嶠南
『小村外交史』外務省
『南那珂医師会史』
『雲井龍雄全傳』安藤英雄
『自然の人小村壽太郎』枡本卯平
『小村寿太郎』黒木勇吉
『骨肉』小村捷治
『西南記伝』黒竜会遍
『西郷いくさ』小村精一
『長崎県史』長崎県史編集委員会
『青春の自画像』英文自叙伝
『大学々生溯源』橘南魚郎